真実を求める母の闘いは続く

加害者を"不起訴"にした根拠はどこにあるのですか？

真実を追求し続けてきた母親の阿部智恵さん。「何の根拠もないまま、息子の信号無視、スピードオーバーと判断されてしまいました。私は真実が知りたいのです」

2001年10月16日、愛知県豊田市の交差点で、ひとりのライダーが命を落とした。大型バイクで直進中、Uターンしてきた対向車を避けきれず衝突したのだ。警察は交差する道で信号待ちをしていたドライバーの証言を元に、「バイクは青信号だった。事故の原因は、加害者にある」と断定。ところが事故から1年2カ月後、検察庁から突然告げられたのは、「加害者は不起訴」という思わぬ結果報告だった。それがいつのまにか、亡くなったライダーの赤信号無視とスピードオーバーにされていたのだ。一方的な判断に納得できなかった両親。その長い闘いを追った。

昨年（2007年）の夏、私の元に切実な一通のメールが届きました。

『柳原三佳　様

御無沙汰しております。静岡の阿部智恵です。

三佳様、私、今、浩次の事故の件でどうしたらよいのかわかりません。毎日、毎日、事故の事を考え、検察庁が下した不起訴決定にどうしても納得出来ません。

昨年、最高検察庁にこれまでの経過を提出し、なぜ加害者が不起訴になったのか、高検から納得できる回答をいただけるようお願いしました。でも、何度たずねても、「回答出来ない」の繰り返しです。

時効が過ぎたとは言え、私達には時効はありません。このままでは、浩次は浮ばれません。私は一生後悔すると思います。一生、息子の死を受け止めることは出来ません。

どうか三佳様、力になって下さい。雑誌やホームページで、検察庁の判断が正当か否かを問いかけてください……』

メールを読みながら、息子を失った母親の思いが、胸の奥に重く響きました。

事故の概要については、P43の現場見取り図を見てください。当初、バイクは青信号で進行していたと判断されていました。それがいつのまにか、逆になっていたというのです。

なぜ、どういう理由で、信号の色が突然「青」から「赤」に変わったのか？　あの広い交差点で、いったい何が起こったのか……。ご両親にはいまだに何の説明もされていません。

事故から間もなく7年。この時点で、交通事故の時効（5年）はとうに過ぎていました。しかし、息子の名誉を回復するためのご両親の苦しい闘いは、事故以来、ずっと続いていたのです。

事故を起こさないためにジムカーナで特訓

この事故で亡くなった阿部浩次さん（当時29）は、大学の工学部を卒業後、少年の頃からの夢だった車の開発の仕事に携わっていました。学生時代はモトクロスの選手として数々の大会で上位入賞を果たし、大学では公認のバイクサークルに所属し、部長を務めながらジムカーナにも出場。

サークルの後輩には、「ジムカーナは速く走るためではなく、路上で事故を起こさないためにやっている」と語っていたそうです。また、バイクのメンテナンスに関してもシビアで、後輩が大雑把な組み立てをしていると、

「自爆するのは勝手だが、公道ではおまえ以外のヤツも走っているんだぞ、巻き込むつもりか」と厳しく指導するような青年でした。

これほどまでに信念を持ってライディングテクニックを磨いていたライダーが、幹線道路の広い交差点で、信号無視などするだろうか……。

偏った先入観だと言われるかもしれませんが、この事件を取材する私の中にそんな思いがあったことは事実です。

そこで、昨年12月8日、私はこの連載でいつも図面を書いていただいているイラストレーターの吉岡さんと共に、愛知県豊田市の事故現場を見に行くことにしました。

早朝、千葉の自宅をマイカーで出発。都内で吉岡さんと合流し、東名をひた走って静岡県藤枝市の阿部さん宅へ。そこからは阿部さん夫妻も一緒に私の車に乗っていただき、再び東名高速で名古屋方面をめざしました。

藤枝から豊田の事故現場までは、どんなに順調に走っても、往復3時間以上はかかる道のりです。この道程を、阿部さん夫妻は、現場調査や目撃者探しのビラ配りのために、数え切れないくらい通いつめたそうです。

「本当に辛かったです。暑い日も、寒い日も、何度も何度も現場に足を運んでは、計測したり、ビデオを撮ったり、ビラを配ったりしました」

この日、私たちが豊田市の事故現場に到着したときには、すでに日が傾きかけていました。

現場は片側三車線の幹線道路。バイク側から見ると、交差点の手前はかなり急な登り勾配になっており、平面図からはとても想像のできない特殊な形状の道路でした。

あの日、夕方5時に仕事を終えた浩次さんは、いつものようにこの交差点を直進して帰宅する途中でした。しかし、交差点を通過しようとしたとき、突然目の前をUターンした対向車の軽トラックに塞がれてしまったのです。

母親の智恵さんは、事故現場に花と線香を手向けると、当時のことをこう振り返りました。

「豊田警察署で私たち遺族が説明を受けたのは、ちょうど四十九日を過ぎた、12月9日でした。このとき、担当警察官ははっきりとこう言ったんです。

『目撃者が出てきてくれたんです。息子さんの信号は、確かに青でした。この事故は、対向の加害者がUターンするために出てきたことが原因です。相手にはもう言ってありますから……。ところで、その後、相手から何か連絡がありましたか？』

私が、『何もありません』と答えると、その警官は、『とんでもないな、誠意が全くない。私からそれとなく話しておきましょう』と、そこまで言ってくれたのです」

事故処理は警察がきちんと進めてくれるはず……このとき、阿部さん夫妻はそう信じて疑いませんでした。

阿部浩次さん。大学時代に学んだ車体サスペンションの解析技術を応用しトヨタの関連会社で高度な技術開発に挑戦していた。2カ月後には彼女と新居に転居する予定だった

阿部事件 ①

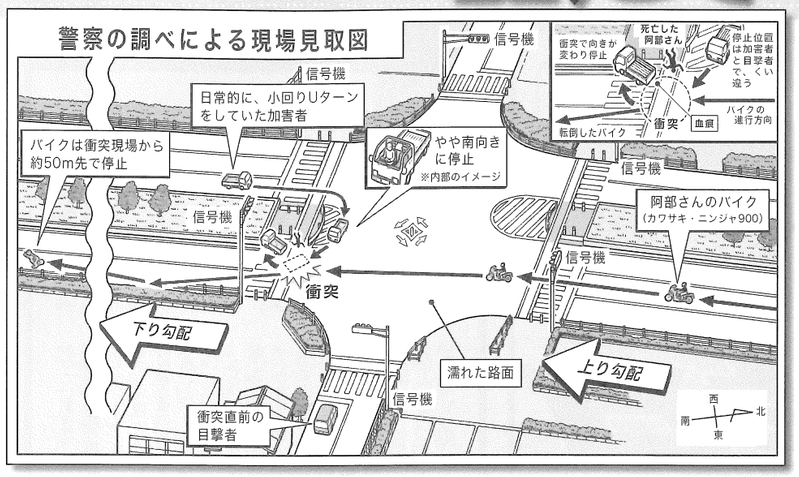
事故から8年……

検察官殿、答えてください！

●取材・文―柳原三佳　●イラスト―吉岡昌諒

柳原三佳
やなぎはらみか

バイク雑誌の編集記者を経てフリーに。交通事故を主なテーマに執筆する他、TV出演、講演活動も行う。本誌や『週刊朝日』に連載した交通事故の告発ルポは、自賠責制度の大改正につながり話題を呼んだ。また検視や司法解剖に関する取材も精力的に行い、日本の死因究明のひずみを鋭く指摘している。最新刊『自動車保険の落とし穴』『焼かれる前に語れ』『交通事故被害者は二度泣かされる』など著書多数。自らも限定解除のナナハンライダーである。



突然の不起訴決定と検察官の暴言

ところが事故から1年2カ月以上過ぎた、2002年12月27日、名古屋地検の検事から、阿部さんの元に突然、「相手の運転手は不起訴になりました」という電話が入ったのです。

阿部さんはそのときの驚きをこう語ります。

「びっくりした私は、検事にこう言い返しました。『それはおかしいです。事故直後、警察から、事故の原因は加害者にあるとハッキリ聞いているんです！』すると検事は、『テープに撮ってあるんですか？　口答では証拠にはなりませんよ』と、そう言うのです」

その後も、信じられないようなやり取りが続きました。

阿部さんの記憶にもとづいて再現すると……、

阿部「加害者はどのように言っているのですか」

検事「Uターンしようと待っていたら、信号が赤になったので出たと言っている。目撃者は、赤で信号待ちをしていた。事故が起きてすぐ目の前の信号を見たら青になっていた。だからバイクは交差点の中が全部赤になった3秒間に入ったんだ」

阿部「その根拠はなんですか？（加害者も、目撃者も）初めは、そんなことは言っていなかったと聞いていますが……」

こうしたやり取りが何度か続いたときでした。突然、検事がキレたというのです。

「検事は電話口の向こうで、ものすごい口調になり、『初めから赤だと言ってんだぁー！』と大声で怒鳴りはじめたのです。私は本当に驚き、ショックを受けました。検事とは、悲しみのどん底にいる遺族に対し、怒鳴り散らし、脅迫めいた言葉を投げつけるものなのでしょうか。なぜ、実際の目撃証言とは異なった内容を私に説明したのか……。この検事は、目撃証言を偽って、加害者を不起訴にしたとしか思えないのです」

母親の智恵さんと検事とのやり取りを見かねた父親の勝吉さんも、この日のやり取りを鮮明に記憶していました。

「私も電話に出て、『それでは、裁判をするしか方法がないんですね』と言ったところ、この検事はさらに怒鳴るような口調で、『お前は、何で裁判するのかね、誰と裁判するのかね、やっても勝ち目が無いものを……。お金もかかるし、時間もかかる』そんな暴言を吐いたのです。信じられますか？『お前』と、呼び捨てなんですよ」

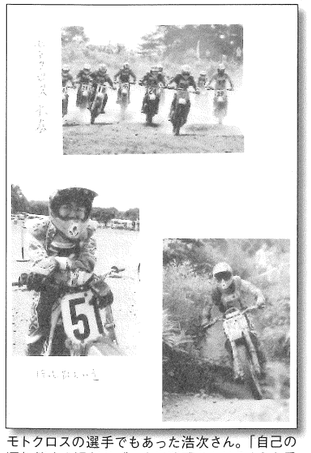
ちなみに、この日まで阿部さん夫妻は検察庁に一度も呼ばれたことはありませんでした。ただ警察や検察を信じて、加害者が処罰されるのをひたすら待っていたのです。それなのに、結局、警察でも、検察庁でも、裁判所でも目撃者の実況見分は一回も行われることなく、加害者の言い分だけで、信号の色が逆転し、不起訴になっていたのです。

納得できなかった阿部さんは、2005年12月、「検察審査会」に不起訴不当の申し立てをおこないました。つまり、加害者が不起訴になったことになったことについて納得ができないので、もう一度しっかり調べて起訴してほしいという手続きです。申し立てを行なうまでには、まさに血のにじむような独自調査を行ったそうです。

しかし、2006年3月、検察審査会は「不起訴相当」と議決。

この時点ですでに事故から4年以上が過ぎ、時効まであと7カ月をきっていましたが、加害者が不起訴となった根拠については、なにひとつ具体的な説明はないままだったのです。

（次号に続く）



モトクロスの選手でもあった浩次さん。「自己の運転能力を過信せず、人に迷惑をかけるような乗り方は絶対しない」が彼の持論だったという

はみだし柳原情報　本連載で取り上げている事件の多くは、朝の情報番組『スーパーモーニング』（テレビ朝日）でも特集されています。毎回、柳原三佳もスタジオ出演！　テレビ欄のチェックをお忘れなく。